

夢の卵

豊島与志雄

青空文庫

遠い昔のことですが、インドの奥に小さな王国がありました。その国の王様の城は、高い山のふもとに堅い岩で造られていました。前にはきれいな谷川が流れており、後ろには広い森が茂っていました。谷川の水はいつも冷たく澄みきって、苔むした岩の間にさらさらと音を立てていますし、森の奥には何百年となき古い木が立ち並んで、魔物が住んでると言われていて、ほとんど誰も足を踏み入れる者がありませんでした。

その城に、美しい若い王子が一人ありました。朝のうちは、えらい学者達についていろんなことを学び、午後になると、城の中の庭を駆け廻ったり、城の前の谷川で遊んだり、また時には、谷川の向こうの町やその近くの野原を、象の背に乗って散歩しました。晩には、国王に仕えている年とつた侍女達じじよたちから、おもしろい話をききました。そして夜眠つてからは、さまざまな夢をみました。鳥や獣けだものや虫や花や化け物ばや、そのほか見たことも聞いたこともない不思議なものが、夢の中に出てきました。

それらの夢をみるのが、王子にとっては一番の楽しみでした。そして翌朝になると、

侍女や学者達に、また国王や女王へまでも、夢の話をしてきかせました。水の精から銀の魚をもらったことだの、真珠の眼玉を持つてる小鳥のことだの、空いっぱいにつ赤な花を開いた大きな草のことだの、奇妙な声で歌いながら踊る虫のことだの、五色の息を吐く怪物のことだの、自由自在に空を飛び廻る仙人のことだの、いくつもいくつもありません。

王子があまり夢のことばかり話すものですから、国王はある時王子をたしなめました。

「そんなに夢のことばかり考えないで、お前はもつと確かなことに心を向けなければいけない。学者達についてもつと熱心に勉強しなければいけない。学問というものは、みな確かな本当のことばかりで、深くはいると、夢よりもいつそう不思議なおもしろいものだ。」

ところが夢の方は、みな不確かな嘘ばかりで、眼がさめると消えてなくなるではないか」けれど王子にとっては、夢もやはり学問と同じように、確かな本当のことであると思われしました。ただ、国王から言われた通り眼がさめると消えてなくなるのだけが不満でした。もし、眼がさめてからも夢が消えなかつたら……！ 夢を捕えることが出来たら……！ 「そうだ、夢を捕えてやろう」と王子は考えました。

ところがどうして夢を捕えてよいか、いくら考えてもわかりませんでした。それで王子

は学者達に、夢を捕える仕方しかたをたずねました。けれどいくら学者達が知恵をしぼっても、そんなことはとても考え出されませんでした。

「夢を捕えることばかりは、私共の知恵も及びませぬ」と学者達は答えました。

それでも王子は力を落としませんでした。この上は自分一人で夢を捕つかえてやろうと決心しました。夜寝る時、一生懸命にその覚悟をしておいて、それから眠りました。そして夢の中にいろんなものが出て来ると、はっと眼を覚ましながら両手を差し出しました。けれどその時には、もう夢は消えてしまっていました。王子は口惜くやしくてたまりませんでした。どうかして夢を捕えたいと思つて、両手を布団ふとんの外に出して寝ましたし、しまいには、網かごや籠かごなんかを手握つて寝ました。そして夢をみてから、はっと眼がさめるかさめないうちに、網や籠を夢の上に押つかぶせようとすると、もう夢は消えてしまっていました。何度やっても同じことでした。

「どうしたらいいかしら？」と王子は昼も夜も、そのことばかりを考えていました。

ある夜、王子は疲れきつた悲しい心で、いつもより深く眠つてしまいました。すると間もなく、また夢をみました。……紫色の雲が遠くから飛んできます。それをじっと見つめていると、もやもやとしたその雲が、自分のすぐ前までやって来て、その中から、身体中

まつ白な長い毛の生えた老人の姿が、ぼんやり浮かび出ました。老人はにこにこ笑いながら、王子に向かって言いました。

「王子、あなたがいくら骨折つても、夢を捕えることは出来ません。けれど、あなたがあまり熱心なのに免じて、夢の精を一つ見せてあげましょう。私はこの城の後ろの森の王です。これからすぐに私をたずねておいでなさい。森の奥の奥に大きな櫛の木があります。それが私です。私の懐に夢の精が一ついます。みごと私をたずねて来ましたら、その夢の精と一日遊ばしてあげましょう」

王子はまだ半ば夢からさめずに、いきなり飛び起きました。とたんに、老人の姿は雲と共にすーっと消えてしまいました。王子はしばらくぼんやりしていましたが、やがて老人の言葉をはつきり思い出しました。そして、是非ともその言葉に従わねばならないような気がしました。

二

王子は身仕度をし、長い外套をつけ円い帽子をかぶり、短い剣を腰にさして、誰にも

気づかれぬように、そつと城をぬけ出しました。外はまつ暗な夜でしたが、不思議なことには、ほの白い一筋の道が森の方へ通じています。その道を歩いてゆくと、ちようど土手でも乗り越すように、高い城壁をもわけなく越せました。それから先は、魔物が住んでいるという森の中へ、けわしい坂になっていきます。けれど王子はほの白い道を頼りに、恐れる気色もなく、ずんずん進んで行きました。高い山の頂の方へ、深い森の中を上つてゆくのですが、まるで宙をかけるように、少しも骨が折れないで、非常に早く道がはかどりました。王子はそれに力づいて、息をするまも立ち止まらずに、まつしぐらに上つて行きました。

ところが、城から山の頂までの半分ほどの所で、今まで王子の前にほの白く続いていた一筋の道が、ぷつりと切れてなくなりました。王子はびっくりしてあたりを見廻しました。どこからさすとも知れぬぼんやりした明るみに透かして見ますと、何百年たったか知れないほどの大きな木がまつ直に立ち並んでいます、その枝葉の茂みが空をおおいつくしています。ちようど、大きな円柱の立ち並んだ広々とした部屋の中にはいったようです。しかもその部屋の広さが限らない上に、燈火の光もなく、何の飾りもなく、足下にはじゆうたんのかわりに、名も知れぬ気味悪い葛や茨が、積もり積もった朽葉や枯枝の上に

はいまわっています。王子は恐ろしくなつて立ちすくみました。

そのうちに、今まで静かだった森が、ゴーツゴーツと底深い唸り声を立て始めました。その唸り声の間から、重い鈍い声が四方から王子へ呼びかけてきました。

「誰だ？」

「何しに来た？」

「どこの者だ？」

「どこへ行くのだ？」

「何者だ？」

王子は薄ら明りにきつと見廻しましたが、ただ声だけで何の姿も見えず、大きな木が化け物のように立ち並んでるだけでした。そして森全体はやはり、ゴーツゴーツと唸り続けていました。

王子は恐ろしさに震え上がりそうなのを、じつと押しこらえて、剣の柄を握りしめながら、一生懸命に叫び返してやりました。

「僕はこの山の下の城の王子だ。森の樫の木に逢いに来た。どこにいるのだ？ 返事をしないか」

すると、「おーう」というほえるような声の一つ、森の唸り声の中から一ひときわ際高く聞こえてきました。王子はもう命がけになって、その声の聞こえた方へ、茨いばらかずらや葛くわの中を踏み分けて進んでゆきました。

しばらく行くうちに、はるか向こうの方から、ぼーっと薄赤い光がさしてきました。王子はにわかになんか力強くなって、その光の方へ飛んで行きました。そして、あッ！と叫んだまま棒立ちになってしまいました。

それももつともです。すぐ眼の前に、何千年たつたとも知れない、また何の木とも知れない、城のやぐらほどもある大きな木の幹みきが、すつくとつつ立ってしまって、その上の方に洞穴ほらあなみたいな穴がありまして、穴の口に、こちらを向いて、金色こんじきの大きな鳥がとまっているではありませんか。その鳥の全身から出る金色の光に、王子は眼がくらみそうになりました。それからようやく気をとりなおして、じっと向こうを見やりました。すると、何故なぜともなく、その大きな木は森の王の檜ひのきで、その金色の鳥は夢の精だということを、王子は知りました。森の唸うなり声はいつの間にかやんでいました。

鳥はそのめのうのような赤い眼で、王子の姿をじっと眺めましたが、しばらくするといきなり大きな翼を広げて、王子の前に飛び下りてきました。そして足を屈め頭を垂れて、

背中に乗れとでもいうようなうすをしました。王子はちよつと迷いましたが、鳥のめのう色のやさしい眼を見ると、すっかり信じきった気持ちになって、その背中へ飛び乗って、柔らかい首筋くびすじへしつかとしがみつきました。

王子が背へ乗るが早いか、鳥は大きな金色の翼を動かして飛び上がりました。不思議なことには、そんな大きな翼で飛んでるのに、少しも空を切る音がしませんでした。一瞬しゆん間のうちに、森の枝葉かれはの茂みの上にぬけ出て、それから空高く舞い上がり、一時間に何百里という早さで、どこともなく飛んで行きました。

三

王子は一生懸命に鳥の首筋にしがみついていたしましたが、だいぶたつて、鳥がにわか飛ぶのをやめましたので、恐る恐る眼を開いてみますと、まあどうでしょう。そこは雲の上までそびえ立つた高い山の頂いただきで、はるか向こうの方に五色ごしきの雲がたなびいて、その中からまん円まるい太陽がぎらぎら出てくる所です。一面に銀の粉がまき散らされたような空と五色の雲とに、出たばかりの太陽の光がぱつと輝り映えています。あまりの美しさに、王子は

我を忘れて眺め入りました。

しばらくたつと、鳥が一つ羽ばたきをしましたので、王子はまたしつかとその首筋くびすじにしがみつきました。鳥はやはり一時間に何百里という早さで、そして音も立てずに飛んでいって、今度は広い牧場の中の一本の木の上にとまりました。見渡す限りはてもない広々とした牧場で、いろんな花が一面に咲き乱れていまして、草の葉にたまった水銀の露の玉をとばしながら、雪のようにまっ白な羊の群が遊んでいます。

しばらくすると、鳥はまた一つは羽ばたきをして、王子がその首筋にしがみつくのを待って、やはり一時間に何百里という早さで、別の所へ飛んで行きました。

そういうふうにして、王子は金色の鳥に連れられて、たくさんの不思議な所を見て廻りました。水の精達が遊びたわむれる河の淵ふちをも見ました。蠅はえのような小さな小鳥の国をも訪れました。魔法使いの住んでる洞穴ほらあなへも入りました。虹の橋をも渡りました。月の世界へも行きました。天の川へまでも上りました。その一つ一つをくわしく言っていると、いつまでたつても話しきれるものではありません。世にありとあらゆる不思議な所ばかりですもの。皆さん自分で想像してごらん下さい。けれど恐らく皆さんの想像も、その昼から夜へかけて王子が見ました事柄ことがらの、千分の一、万分の一にも及ばないでしょう。

さて、数限りない星が集まって河原の砂となり、青く澄みきった水がゆったりと流れてる、あの天の川を見てしまつて、王子がまた金色の鳥の背中に乗ると、鳥は天から地上へ舞い下りてきました。地上へ近づくにしたがつて、西の山の端に沈みかけた月の光で、ぼんやり下の景色が見て取れました。今度はどこへいくのかしらと、王子は眼を見張つて眺めました。まっ黒な山、山の腹に茂つてる森、森の裾にある城、城の前に広がつてる野原、野原のまん中にある町……王子は何だか見覚えがあるような気がしてきました。そしてなおよく見ると、それは見覚えがあるどころか、実は自分の国で、森の裾にある城は自分の城だったのです。王子はその城をぬけ出した時から、両親の国王と女王とのことやその他自分の国のことを何もかも忘れていましたが、今眼の下に自分の城を見ると、急になつかしくなつて、思わず知らず叫びました。

「あ、僕の城だ」

そのとたんに、ふと気がゆるんで、鳥の首筋にしがみついた手を離したものですから、あツというまに王子は鳥の背中から滑つて、まっ逆さまに城の上へ落ちてゆきました。途中で気が遠くなつてしまいました……。

四

……ごく遠い所から、何だか聞き馴れた声^なが自分を呼ぶような気がして、王子はぼんやり眼を開きました。すると不思議にも、城の中のいつもの寢床に寝ているのでした。部屋の中には、国王や女王や侍女^{じしよ}達や二三の家来^{けらい}が、ぐるりと寢台を取り囲んでいました。王子はびつくりして起き上がりました。それを見て、女王が眼に涙をいっばいためながら抱きついて来ました。

「まあ、眼がさめましたか。それでも、昨夜^{ゆうべ}から一体どこへ行っていました？ 私達はどんなに心配しましたでしょう！ よく帰って来てくれましたね。でも、黙って帰って来て寝てしまうなんて！ どうしたのです？ まあ、あなたはまだどうかしてはいませんか」

母の女王の言うことが、王子にはさっぱり訳がわかりませんでした。それでなおよく聞いてみますと、実はこうだったのです。——昨日の夜中に、寢床の中に寝ていたはずの王子が、ふいにいなくなつてしまいました。たった一人の王子がいなくなつたのですから、城の中はひっくり返るような騒ぎになりました。城の隅^{すみ}々^{ずみ}はもちろんのこと、近くの野原や街に至るまで、家来^{けらい}達が四方八方に手分けして、王子を探し廻りましたが、どうして

も見つかりませんでした。夜が明けて、昼間になって、そしてまた夜になるまで、皆は王子を探し廻りましたが、何の手がかりもありませんでした。国王や女王は、悲しみの涙にくれて、泣き沈んでばかりいました。ところが夜になって、夜もふけてから、一人の侍女じしよが、何度も見廻った王子の部屋に、も一度何気なくなにげはいつてみますと、王子は寢床にすやすや眠ってるではありませんか。侍女の知らせによって、国王や女王や、他の侍女達や主だった二三の家来達が、その部屋にやって来ました。そして王子を呼び起こしたのです。「じゃあやはり、本当だったんだ！」と王子は叫びました。

実は王子にも、自分が金こんしき色の鳥に乗って飛び廻ったのが、夢だったのか本当だったのかよくわかりませんでした。けれど、皆の話を聞いて、自分が昨日の夜中から城にいなかったことを知ると、もう疑いようがありませんでした。

「本当だったんだ！」と王子はくり返し叫びました。そして昨夜からのことを皆に話しました。

皆の驚きはどんなだったでしょう！ けれど、誰にも王子の話が本当だとは受け取れませんでした。しばらく黙ってた後に、国王は言い出しました。

「そんなことが世にあるはずはない。それはきつと森の奥に住んでいる魔法使いのせいだ。

わしはこの国の王として、その魔法使いを退治たいじしないわけにはゆかない。王子をたぶらかされて、そのまま許しておくわけにはゆかない。夜が明けたら早速、退治に出かけてやる」

それに反対する者は、わずかに三人しかいませんでした。その一人は女王でした。

「そんな無謀なことをなされますと、どんな災いが来ないとも限りません」

「なに、魔法使いくらいに負けるものか」と王は一言ごんしりぞに退けました。

第二の反対者は、昔からその国にいる年とつた家来けらいでした。

「あの森に魔物がいると言われていますのは、実は嘘でありましてこの城を守って下さる神が住んでいられるのであります。決して森にはいるなどは、代々の王様の言い伝えであります。それを破られてはよろしくございません」

「なに」と国王は言いました。

「魔物であろうと神であろうと、王子をたぶらかすようなものは、決して許してはおけない」

第三の反対者は王子自身でありました。

「僕はたぶらかされたものではありません。本当の夢の精に逢ったのです」

「それでは、その夢の精とかをひつとらえてやろう」と国王は言いました

その上、王子が帰られたのを喜びに出て来る強い家来達けらいが、皆して国王の企てくわだに賛成し
まして、すぐにも魔法使い退治たいじの用意にかかろうとしていました。もうどうにも出来ませ
んでした。

王子は初めて悲しくてたまりませんでした。そのうちに、ふと考え直してきました。
国王や強い家来達の助けをかりて、あの夢の精を生捕りいけどにすることが出来たら！ そう思
うと急に元気が出てきました。

「それでは僕がその金こん色しきの鳥の所へ案内しましょう。そのかわり鳥を少しも傷つけない
で生捕りにして下さい」と王子は頼みました。

国王は大変喜んで、王子の言う通りになることになりました。

「だが、誰も武器を持ってゆかないかわりに、知恵の鏡だけは持ってゆく」と国王は言い
ました。

知恵の鏡というのは、その国に昔から伝わってるものでありまして、それで照らすと、
どんな化け物ばでもすぐに正体を現わしてすくんでしまい、どんなものでも人の思うままに
なるといふ、世界に二つとない宝でした。

夜が明けると、国王と王子は強い家来を二十人ばかり引き連れ、皆一人一人象の背に乗り、一つの象には大きな鳥籠とりかごをのせて、城の後の森の中へ上がって行きました。

王子は道案内者としてまっ先に進みましたが、一昨日の夜ほの白い道が続いていたのはどの方向だか、さっぱり見当けんとうがつきませんでした。何しろ誰もはいったことのない山の森で、昼でさえその中はまっ暗なほどおい茂もっていて、枯枝かれえだ朽葉くちはの積もり積もった上に、茨いばらや葛かずらがはい廻まわっていて、いくら象でもなかなか上あって行けませんでした。その上、森の奥深くへ来ると、森全体が恐ろしい勢いきおいで唸うなり出しました。けれど王子達の方には宝の鏡がありました。茨や葛の中にふみ込んでも、方向に迷っても、森が唸うなっても、一々鏡に照らして難がたをさけ、次第しだいに山の中ほどまで登あり参まゐりました。

やがて皆は、森の少しうち開けた平たい所に出ました。見ると、向こうに大きな櫨かしの木が立たっています、その幹みきにある洞ほら穴あなみたいな穴の所に、金色こんじきの大きな鳥がとまっています。皆はそのまぶしいほどの美しい金色の光に、あッと言って驚おどきました。鳥は昨日の疲れか、首を垂たれて眠ねっているようでした。

国王は驚きが静まると、「それッ！」と家来達けらいに合図をして、鏡を差し上げながら鳥の方を照らしました。そのとたんに鳥は首を上げて、皆の方を見て、飛んで逃げようとしたが、鏡に照らされてるせいかな、翼がよく利かないで、ばたばたと地面へ落ちて来ました。そしてなお足で逃げようとするのを、強い家来達が大勢おおぜいで取って押えて、象の背中の籠かごの中へ入れてしまい、籠の上にはさらに袋をかぶせました。

皆は鏡の力にいまさらながらびつくりし、次には踊り上がって喜びました。国王は魔法使いを捕とらえたつもりでいましたし、王子は夢の精を捕とらえたつもりでいました。そして一同は喜び勇んで城の方へ帰って行きました。

城に着くと、城の中の者はもちろんのこと、話を伝え聞いた町の人達までが大勢、魔法使いが捕つかまって来るといので、首を長くして待ち受けていました。国王は城の広い庭に鳥籠りかごを下ろさせ、それから袋を取り去って中をのぞきました。まわりの人達も一度にのぞき込みました。

ところがどうでしょう。籠の中には、魔法使いもいなければ金色の鳥もいませんでした。ただ一つ、大きな黄金おうごんの卵形たまごのものが転がってるきりでした。皆はあつけにとられました。国王は早速例さつそくの鏡をさしつけてみましたが、やはり大きな黄金の卵形たまごのもので、そ

の色も光も形も少しも変わりませんでした。知恵の鏡の力をもつてしてもどうにもならないとすれば、人間の力でどうなりましょう。ただ黄金の卵というきりで、何のことやわかりませんでした。多くの学者達も口をつぐんでしまいました。

国王は少し変な気がしてきまして、あの金色の鳥は魔法使いでなくて、あるいは王子の言うように夢の精だったかも知れないと、思い始めました。王子は初めから夢の精だと思つていましたから、今それが卵になつてしまつたのを見て、大変悲しがりました。そして、国王からその卵をもらつて、自分の部屋の戸棚とだなに飾りました。

六

その晩、王子は夢をみました。この前の通り紫の雲に乗つて、あの白い毛の老人が出て来ました。そして王子にこう言いました。

「王子、あなたは無法なことをなされました。けれど今このたび度だけは許してあげます。もう二度と森の中の上つてきてはいけません。夢の精はなかなか人間の手に捕つかまるものではありません。もうちゃんと私の懐ふところに戻つてきています。そして、あなたには知恵の鏡めんに免じ

て、卵を一つ差し上げたそうです。それを大事にしまっておおきなさい。城の前の谷川に月の光がさして、そして水が自然に静まる時があったら、その卵をたまご水鏡みずかがみに写してごらんなさい。夢の姿がはつきり見えてきます。またいつか時が来たら、その卵がかえって、金色こんじきの鳥が生まれ出ます。私の言葉を疑ってはいけません。そしてまた二度と森の中に上のほつて来てはいけません」

それだけ言つて老人の姿は消えてしまいました。

王子は不思議な気がして夢からさめました。起き上がると、もう東の空が薄うす紅あかくなっていました。王子は国王と女王との所へ駆けて行きました。国王も女王も起き上がっていました。

「今私達の方からあなたを起こしに行こうと思つていたところですよ」と女王は言いました。

王子はすぐに夢の話をしました。すると、実は国王も女王も同じ夢をみて起き上がったのでした。三人は不思議な思いをしました。国王も今では、あの金色の鳥は夢の精だったことを知りました。そして城の後ろの森にはいることを、改めてすべての人に禁じました。それから王子は、月の照つてる晩は何度も城の前の谷川の所に出て、その水を見渡しま

したが、水は岩の間を音を立てて流れていまして、自然に静まるなどということとはとてもなさそうでした。試みに黄金おうごんの卵を持つていつて写してみても、早いぎわめいた流れですから、少しも写りはしませんでした。それで王子もしまいには諦めて、番人を置いて谷川を見張らせました。けれどいつまでたってもその水が自然に静まり返ることはありませんでした。

王子はその方はもう思い切つて、今度は卵がかえるのを待ちました。銀の籠かごを国王から作つてもらい、その中に香木こうぼくの屑くずで作つた巢ねを入れ巢の中に黄金おうごんの卵たまごを置いておきました。そして朝と晩には必ず中をのぞいてみました。けれどもやはりいつまでたつても元の卵のままでした。

そのうちに国王は亡なくなり、王子が国王の位に即き、次いで自分もまた年をとつて亡くなり、それから幾いくにん人も王が代々後を継いで、幾千年もたちましたが、城の前の谷川の水が静まることのないように、黄金の卵がかえることもありませんでした。またその卵をかえすことを知つてる者もいませんでした。今になおその卵は、夢の卵と言われて、銀の籠の中の香木の巢の中にはいつています。

いつになつたら、夢の卵がかえつて金色の鳥が生まれ出ることでしょうか？

青空文庫情報

底本：「豊島与志雄童話集」海鳥社

1990（平成2）年11月27日第1刷発行

入力：kompass

校正：門田裕志、小林繁雄

2006年4月28日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

夢の卵

豊島与志雄

2020年 7月17日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>